第84回麻布獣医学会　一般演題10

扁平上皮化生による重度の前立腺腫大を併発したセルトリー細胞腫の犬の1例

藤本　晋輔，伊藤　哲郎，斑目　広朗，渡邊　俊文

麻布大学附属動物病院

［はじめに］

精巣腫瘍は犬において皮膚腫瘍に次いで発生頻度が高く，遭遇する機会の多い疾患である。特にセルトリー細胞腫は約25％がエストロゲン産生性であるために，雌性化，両側性の対称性脱毛や色素沈着，骨髄抑制の併発が認められる。

また，扁平上皮化生による前立線腫大もしばしば認められる。今回，我々は重度の前立腺扁平上皮化生を併発したセルトリー細胞腫の症例に遭遇し，良好な治療経過が得られたので概要を報告する。

［材料および方法］

症例は6歳9カ月齢のゴールデンレトリーバーであり，1歳時に片側のみの精巣摘出を受けていた。1年前から乳頭腫大，包皮の肥厚，腹部と頸部の対称性脱毛が認められ，精査の目的で本学附属動物病院に紹介された。本学初診時，身体検査において雌性化徴候および脱毛の他に下腹部腹腔内に巨大腫瘤が触知された。

各種画像診断により前立腺領域に11 cm大の巨大腫瘤と隣接する5 cm大の腫瘤を認めた。前立腺領域腫瘤の細胞診では異型性のない扁平上皮細胞集塊と好中球が認められ，血清エストラジオール濃度の上昇（43 pg/ml）を認めた。血液検査では骨髄抑制を疑う所見はなく，生化学検査でも大きな異常は認められなかった。以上の所見から，エストロゲン産生性腫瘍と併発する扁平上皮化生による前立腺腫大と診断し，開腹手術を実施した。

［結果］

開腹所見では，右腎の尾側に腫瘍化した腹腔内潜在精巣を確認し摘出した。前立腺は肉眼的に均一充実性で，術中超音波検査では少数の嚢胞を認めた。嚢胞はドレナージを行うほどの大きさではないため経過観察を行った。病理組織検査では摘出精巣は壊死性化膿性精巣炎を伴うセルトリー細胞腫であり，腫瘍細胞の脈管内浸潤が多数認められた。術後1カ月で前立腺の縮小が認められ，血清エストラジオール濃度は正常値（13 pg/ml）まで低下した。術後3カ月ではさらに前立腺の縮小が認められた。

［考察］

セルトリー細胞腫に併発する前立腺腫大は過剰エストロゲン暴露に誘発される前立腺導管腺上皮の扁平上皮化生が主体と考えられる。本症例においてもセルトリー細胞腫摘出後の血中エストラジオール濃度の低下に伴い，前立腺の縮小が認められた。また，セルトリー細胞腫は摘出後数年経過した後に，転移巣からのエストロゲン産生が生じたことが報告されている。

病理診断において腫瘍細胞の脈管内浸潤が多数認められたことから，明らかな転移巣は確認されなかったが，注意して経過観察する必要があると考えられた。